



めじかじ
通信

No.157

内なる想いを弦にゆだねて

ヴァイオリン奏者

村上 あゆ美さん 〓 柏木 〓

四本の弦から紡ぎ出される音は、もはや自分の言葉のようである。

上田市に続く薬店の家に生まれ、3歳から手にした楽器は彼女の表現手段であると同時にいつしか彼女の内面をも奏でる大切な一部となった。4年前から暮らす小諸で、今日もヴァイオリンに向かうのは村上あゆ美さんだ。

他の芸の道と同様、ヴァイオリンという楽器もごく幼い頃からの訓練が求められる。本人の意志でもあり、母親の希望でもあったヴァイオリンはその幼い心を捉え、友達と遊ぶことより、



毎日の稽古をまず先に済ませることがいつの間にか日課になった。思うように弾けない時は手洗いにこもって泣いたが、しばらくして母親の「まだ頑張る？」との問いに、大きく頷いてふたたび楽器に向かった。

薬剤師の母は忙しい仕事の合間を縫っては、幼い娘の手を引いて長野市の音楽教室や東京の先生のレッスンに連れて行き、娘の音楽的成長を自分のことのように喜んできた。この頃はだいたい歳を取り、昔のように身軽に動くことはできなくなったが、今も元気に生きる秘訣は娘の演奏を聴きに行くことだ。

東京の音大を出て故郷に戻ってから、一人前で弾くこと」を第一とすることになった。彼女が、リサイタルやアンサンブル、オーケストラの一員として演奏を続けて来た。

クラシックという音楽分野では、バッハやモーツァルト、ベートーヴェンなどに代表される2、300年前の音楽に、同

じく長い歴史を持つ古い楽器で演奏することが多い

が、その演奏者は彼女のようになんか今を生きる人間であるということは、脈々と続く音楽の歴史を今も刻一刻ときざみ続けているようでとても神秘的だ。



ことに様々な情報が瞬時に拡散され、新しいことがもてはやされる現代社会でも、古(いにしえ)の音楽が今なお求められていることは、人間が持つ潜在的な美意識や精神性に深く関係することがあるのだろう。ヨーロッパ生まれの音楽が、日本という島国の、四方を山に囲まれた信州に生きる音楽家の心を捉え、「自分には弾くことしかないと稀有なことである。」

小諸に移り住んだ村上さんにとって、自宅で愛猫と過ごす時間と同様に、日々の癒し

ともなり、また感性のリフレッシュともなるのが、浅間山を背後に広がる豊かな自然の中で過ごすひと時だ。上田の街中に育った彼女にとって、小諸の家近くの田園や、標高1000メートルに広がる落葉松林の林道での散歩は心を浄化し、新たな表現への息吹を与えてくれるようだ。とくに凍てつく冬の林は心と体を凛とさせる清らかな冷気を吹き込んでくれる。



ここ数年の環境や心境の変化が功を奏したのか、以前にも増して貴重な演奏機会に恵まれるようになった。活動25年の記念リサイタルや恩師との弦楽四重奏、オペラでの演奏など、「弾くことしかない」自分をひたすら続けて来た手ごたえを感じる日々が続いている。

(取材・文 たかがきしげお)

ゆらさんの四季の薬膳

春と柑橘類

冬の間はりんご愛で過ぎていたのに、急に柑橘類が恋しくなる。春先にこんな経験したことはありませんか。酸味が欲しい―実はこれ、春を感じ始めたからだの素直な声なのです。春は五臓の中の肝臓が活発に働く時期で、冬旺盛だった陰は陽へバトントッチ。そのため体内の気は上へ上昇しようとしています。その結果、めまい、目が赤くなる、高血圧、うつ症状などが出やすくなります。気の巡りをよくし、これらの症状を穏やかにしようとするのが、酸味なのです。

オレンジ、きんかん、文旦、伊予柑、みかん、ポンカンなど。春の店頭を明るくするたぐさんの柑橘類。今日はきんかんの話をしてみたいと思います。鬱々とした気分の解消、食欲不振、胃もたれだけでなく、毛細血管を強化して冷え性改善も期待できます。薄く輪切りにし塩でしんなりさせた大根と輪切りのきんかんを酢、しょう油、ごま油ベースのドレッシングで和えたサラダで、消化力もUP。

(国際中医薬膳師 小清水由良)

